

## 父の「復員」と母

父の戦地のことは、今となってはよく分からない。父に聞いたことがあったが、なんだか話したくないようだった。もっとしつこく聞いておけばと後悔している。メモ書きの『回顧録』(先に『自叙伝』としたが、『回顧録』とする)には、軍隊生活は後に書くとしてあるが、残念ながら病に倒れてしまった。父が戦地から「復員」して、母と再会するまでを未完の『回顧録』から辿りたい。

「佐世保で内地の大地へ第一歩を印したとき、始めてこれで命は助かったと思った。上陸するまでは、まだこれからどうなるか分からないと誰もが思ったに違いない。」

写真は岩波写真文庫『戦争と日本人』の「何年かぶりの復員兵」。どこの港かは書かれていないが、多くの復員兵で一杯である。

父もこんな感じで、長崎県佐世保に着いたのだろうか。『回顧録』には佐世保(ハエの崎)と書かれてあったが、読み飛ばしていた。すこし調べてみると、現在のハウステンボスの近くに港があり、その接続駅が「南風野崎駅」(はえのさき駅)であった。この駅から、中国や東南アジアからの復員者、引揚者が、東京行きの専用の普通列車に乗り込んだという。

「軍隊から解放されて自由の身となり、直ちに思うことは妻子のこと、父母の安否であった。早速内地の被害状況を印した案内図を見ると、名古屋市は殆ど灰燼となっていた。自分は内田橋の家は無いものと感じ、目的地を岐阜として出発準備を進める。出征当時殆ど無かったスルメがたくさん店先にあった。これは珍しいものを見つけたと思い2把ほど買い、土産物として故郷へ持って行くことにする。

さて、復員列車は喜びに溢れた復員者ばかりで、皆心はずませ、一路故郷へ故郷へと列車は走った。空襲で灰燼と化した岐阜市を歩き、美濃町線に乗り上芥見で皆と別れて一人になる。」

父と母は結婚して名古屋市南区の内田橋に住んでいた。空襲が激しくなり、母と姉は岐阜の親戚の家に疎開した。岐阜市の中心部は空襲で焼け野原になったが、疎開先は大丈夫のようだった。今は廃線となった名鉄美濃町線「上芥見」で降り、長良川を渡った「加野」というところだと思ふ。やっと再会して、最初に母が手をつけて、姉が不慮の災難で亡くなったと謝ったという。父は姉の顔を見ることもなく出征していた。

(2017年9月17日)

